

季刊マーメイド

逗子市立図書館報
第16号
2017年5月1日発行
逗子市立図書館
逗子市逗子 4-2-10
046(871)5998
<https://www.library.city.zushi.lg.jp>



頼朝が見た逗子 ～兄・義平は沼間育ち～

頼朝と逗子

源頼朝（一一四七～九九）は十二世紀末、逗子となり鎌倉に幕府を開きました。その時代は、頼朝の父・義朝（一一一三～一六〇）が東国で勢力を広げ、南関東の武士団を統率するほどの力を持っていました。逗子には義朝の屋敷もあったと伝えられています。頼朝も東国武士たちと交わり、幾度も三浦半島内を往来したと思われます。鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』や伝説を参考に、頼朝が見た逗子をたどってみたいと思います。

悪源太義平（あくげんたよしひら）

悪源太義平（一一四一～一一六〇）とは、義朝の長子で頼朝の六歳上の異母兄にあたる源義平のこと

です。義平の母親は三浦大介義明の娘といわれ、義平は母の郷里近く、沼間の義朝屋敷で育ったとされています。

悪源太義平



一猛斎芳虎画『武者鑑』より
(国立国会図書館蔵)

義平は、十八歳で平治の乱に出陣するまで、父・義朝がたびたび京都へ出仕する間、沼間で父の留守を預かり、東国の武士団を束ねていたようです。十五歳の時、義朝の対抗勢力である叔父・義賢（よしかた／木曾義仲の父）の武蔵国の大蔵館（現在の埼玉県比企郡嵐山町大蔵）を急襲して討ち取ったこと

で武勇をとどろかせ、強いという意味で「悪源太」と呼ばれるようになりました。

義平は、平治元年（一一五九）に父と共に平治の乱に参戦し、奮戦しましたが平清盛に敗れました。父や弟らと共に逃れたものの別れ別れとなり、単独で再び京に入つたところを捕えられ、京都六条河原で斬首されました。享年二十歳でした。一方、父・義朝は再起をはかるため東国に向かいましたが、途中、尾張国（愛知県）で源家代々の家人の裏切りにより殺されました。十四歳の頼朝は父とはぐれ、平家の家人に捕えられました。死を覚悟した頼朝でしたが、清盛の継母にあたる池禅尼の助命嘆願により伊豆に流刑となりました。



**鎌倉郡沼浜（ぬはま）郷
法勝寺・五霊神社・光照寺**

逗子の沼間は、古くは「沼浜（ぬはま）」と呼ばれていました。源義朝の屋敷が沼間にあったことを示す根拠は、『吾妻鏡』の建仁二年（一二〇二）二月二十九日の箇所にあります。北条政子が、夢に現れた義朝のお告げに従い、沼浜の義朝の屋敷を亀谷寺（現在の鎌倉・寿福寺）に移した、と書かれています。義朝は京都で元服した後、祖先ゆかりの鎌倉に本拠地を置きつつ、腹心の三浦氏との連絡の拠点として現在の法勝寺近辺に「沼浜亭（ぬはまてい）」という別邸を構えたということです。



沼間の五霊神社（ごりようじんじゃ）は、義朝が沼間の鎮守として建立したという説や、光照寺は義平の菩提を弔うために建てられたという説があります。これらのことについて確証はないのですが、沼間と義朝・義平父子との縁がいかに深いかを示しています。



**久野谷（現在の久木）・
新箸の宮（にいはいしのみや）**

「新箸の宮」の伝説は、頼朝が伊豆での流人時代に、久野谷を訪れたことに由来するものです。治承元年（一一七七）、頼朝は伊豆を出て、三浦一族の二人を伴って鎌倉から三浦方面に向かう途中の名越の山中で道に迷い、一軒の家に入

き着きました。この家の娘は、粟飯に茅の茎を切った新しい箸を添えて一行をもてなしました。この厚いもてなしに感じ入った頼朝は、娘の父親がかつて沼間の屋敷で亡き兄・義平に仕えていた久野谷六大夫（くのやろくだゆう）であると知ると、更に感激したということです。

鎌倉に幕府を開いた後、頼朝は六大夫を訪ね、この土地の名主としました。久野谷（明治期に柏原と合併して久木となりました）という地名はこの六大夫に由来しています。この故事にちなんで「新箸の宮」が建てられましたが、現在では宅地造営のため宮址も定かではなくなっています。



「亀の前」 小坪↪飯島↪鑑摺↪小坪

『吾妻鏡』では、寿永元年（一一八二）に逗子の地名が四回出てきます。いずれも「亀の前」（伊豆の流人であった頼朝から寵愛を受けていた女性）に関する事柄です。

亀の前は、この年の六月に頼朝に呼び寄せられ、伊豆から小坪の中原光家宅に移り住みました。その後飯島の伏見（藤原）広綱宅に移りましたが、十一月、北条政子の知るところとなってしまいました。激怒した政子は、家臣に命じて広綱宅を破壊させたため、広綱は亀の前を伴って鑑摺（あぶずり）の大多和義久宅に逃れました。亀の前は一ヶ月ほど鑑摺に滞在しましたが、十二月に再び小坪の中原光家

宅に移り住みました。亀の前は、小坪に愛着があったのでしうか。

頼朝は亀の前に会うために、小坪を頻繁に訪れたと想像できます。

亀の前



顔貌の濃やかなるのみにあらず、心操殊に柔和なり、去春の比より御密通、日を追ひて御寵甚しと云々。

『全譯吾妻鏡 第1巻 新版』新人物往来社
寿永元年六月一日より

『吾妻鏡』には亀の前について、「ただ容貌が優れているだけでなく、心も特に柔和」と書かれています。

この時から約十年後の建久四年（一一九三）七月、將軍となった頼朝が供を連れて小坪の浜に遊んだ、と『吾妻鏡』に記されています。

その他の頼朝の足跡

《岩殿寺》

頼朝は岩殿寺(岩殿観音)を篤く信仰し、將軍となっても頻繁に参詣していたようです。治承四年(一一八〇)、頼朝が相模西端の石橋山(現在の小田原市)で敗れて舟で房総半島へ逃れる際に、岩殿寺の十一面観音に祈願したそうです(『岩殿寺縁起』)。頼朝だけでなく、政子、大姫、頼家、実朝もたびたび参詣しています(『吾妻鏡』)。

《神武寺》

寿永二年(一一八三)に



平家を討つ際、頼朝は神武寺に戦勝を祈願し、文覚(もんがく／一一三九?～一二〇三?)を住持としました。文覚といえ、六代御前の命乞いをした僧として逗子では馴染

染みの深い名前です。頼朝と文覚とは、共に流人として伊豆で知り合って以来深い親交がありました。

建久三年(一一九二)八月、北条政子が実朝の出産の折に、頼朝は神武寺を含む相模国の二十七の神社仏閣に安産祈願をしています(『吾妻鏡』)。

《多古江河(田越川)》



建久五年(一一九四)八月二十六

日、頼朝は甥の一条高能(いちじょうたかよし)を連れて多古江河を散策しています。高能には頼朝の娘・大姫との縁談がありました。しかし数日前の十八日、大姫はこの話を断っています。大姫は幼い頃、婚約者の木曾義高(木曾義仲の息子)を頼朝に殺害されて以来健康を害しており、頼朝や政子他、皆が

案じていました(『吾妻鏡』)。頼朝は、田越川のほとりで高能とどのような話をしたのか興味深いものです。



このように頼朝は逗子の各所を訪れました。頼朝のことがより身近に感じられると共に、逗子もまた源家一族と深い関わりのある地であることを再認識させられます。

〈主な参考資料〉

- 『逗子市史 資料編1』逗子市 21.Z 1
- 『逗子町誌 改訂』逗子市 21.Z 2
- 『源頼朝と鎌倉』坂井孝一著 吉川弘文館 P 280.1
- 『図説・源平合戦人物伝―決定版―』学研 281.Z 2
- 『吾妻鏡事典』東京堂 210.4 ア
- 『逗子の伝説』逗子教育研究会 29.Z 2
- 『逗子市文化財調査報告書』第1集神武寺 第2集沼間・池子 逗子市教育委員会 70.Z 2